

## 侯孝賢の多様性を貫く研究／批評のために

### ——台湾映画祭+シンポジウム:侯孝賢の詩学と時間のプリズム

坂井 辰司

2011年6月25日、26日の2日間にわたり、台湾の映画監督である侯孝賢にちなんだ映画祭およびシンポジウムが名古屋市内で開催された。25日に愛知芸術文化センターにて侯孝賢監督の映画作品2本の上映および座談会が、翌26日には名古屋大学にて国内外の研究者を招き、研究発表や講演、ディスカッションが行われた。いずれの会場もほぼ満員状態で、本イベントは大盛況のうちに終了したと言える。以下では、まず本イベントの概略を記した上で、簡単に私の感想を述べることにしたい。

初日は、『悲情城市』(1989年)と『百年恋歌』(2005年)が上映された。両上映ともに、当初準備していた席数を急遽増やすほどの盛況だった。その後つづけて行われた座談会に関しても、監督や脚本家の朱天文氏の発言だけでなく、登壇した研究者たちからの発言でも会場は大いに盛り上がった。

翌日は、午前にも基調講演が2つ、午後に研究発表が4つ行われ、研究発表にはコメンテーターによるコメントと質疑応答があった。最後に行われた講演者・発表者・コメンテーターが登壇した全体討論では、思いがけなく侯孝賢監督と朱天文氏も加わるものとなった。ただ、午後の発表に関しては、逐次通訳を介していたこともあり、オブザーバーとして参加していた私が、分析の道筋を見失ってしまった部分もところどころある。そのため、以下のレビューは発表の趣旨に十分に即したものではない可能性があることをあらかじめ注記しておきたい。

午前の基調講演では、まず、藤井省三氏が『『百年恋歌』の中の台湾百年史』と題して、『百年恋歌』に描かれる3つの時代と、同時代の台湾の状況などを時代順に概説した。第2部「自由の夢」の舞台である1911年の

新聞事情や、主人公チャンのモデルと考えられる台中の大地主であるリン・ケンドウについて語り、つづいて「恋愛の夢」の舞台である1966年の状況について、主に中国での文化大革命と関連させながら説明した。最後に2005年を舞台とした「青春の夢」について現代の台湾の状況、特に台湾の若者たちを取り巻くナショナル・アイデンティティーの問題を踏まえた解説を行った後、3つの時代のそれぞれのヒロインが年代順に高級娼婦からホステス、そしてロック・シンガーへと変化していることを指摘し、その変遷が台湾の歴史の一側面を物語っているとの見解を示した。

つづいて、張小虹氏が講演を行った。「パリの長境頭—侯孝賢と『レッド・バルーン』』と題した『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』(以下『レッド・バルーン』)論である。彼女は、侯監督が『レッド・バルーン』において、ロング・テイクを既存の枠組みから「脱領土化」し、トランス・カルチュラルなもの、あるいはトランス・メディアなものへと転化させたと指摘した。

午後の部は、陳儒修氏の発表、「[二十年後の]『悲情城市』再考—音声、映像、時間、空間」で幕を開けた。1989年の『悲情城市』から20年あまりたった今、時間的／空間的な隔たりを有した状態で、主に音声、映像、時間、空間という4つの側面から『悲情城市』を再考する試みである。当時『悲情城市』へと向けられた批判(フェミニズムからの批判、歴史に対する態度への批判)に言及しつつ、現在の視点からそれらの批判に対しての反論を試みる。その上で『悲情城市』の意義は、既存の枕ショット pillow shotや空ショット empty shotの枠組みを乗り越えた枕ショットや空ショットを生成したという美学的な側面にあるとした。

つづいて、ジェームズ・アデン氏が「侯孝賢の『悲情城市』—国の内と外の文化大使」と題した発表を行った。『悲情城市』は文化大使である、というテーゼを掲げ、『悲情城市』がヴェネツィア映画祭での金獅子賞を受賞したことや、国民党政権による戒厳令下で、存在しないものとされていた228事件を題材として扱うことによって、国内外において『悲情城市』が果たした文化的・外交的な役割を考察するものであった。映画祭で対外的なアピールを行おうと目論む台湾の国民党政権の思惑と、映画が扱う題材との間に生じていた齟齬や、国際映画祭で当時の台湾映画が占めていた位置などの要素が複雑に絡み合うなかで、『悲情城市』は文化大使的な役割を果たしていたということが報告された。

最後に、ミツヨ・ワダ・マルシアーノ氏が「侯孝賢の歴史との対話—『珈琲時光』」と題して、『珈琲時光』における記憶の問題についての発表を行った。『珈琲時光』という日本映画を、台湾の映画人が監督したにもかかわらず、日本人が日本映画としてこの映画を受け入れた、という捻れた構図を説明しようと試みる。彼女は侯監督が、例えば1つのショット内で、前景と後景を往復するような運動を戦略的に利用することによって、あるいは、東京の電車の路線図やランドマークを、それぞれの登場人物(個)と結びつけて機能させることによって、小津安二郎や日本映画との相似を成立させたのだと主張する。その上でワダ・マルシアーノ氏は、『珈琲時光』の中に戦略的に用いられた3つの記憶、すなわち、地図、音、映画史の記憶が、日本の観客の記憶を喚起する働きを果たすことによって、『珈琲時光』を日本映画と認識させたのだと論じた。

以上が非常に大まかな2日間の概略である。以下、私の感想を、大きくふたつ述べてみたい。

ひとつは、侯監督が2日間にわたって、何度も繰り返し発言した「観察者」というキーワードについてだ。侯監督は、1日目の座談会において、自分の仕事は「観察すること」であるとしきりに強調していたし、2日目のディスカッションの際に学生からの質問に対しても「観察すること」が重要だと述べていた。このキーワードには、彼の監督作品の最も大きな特徴のひとつである、ロング・ショットとの密接な関係が感じられる。しかしここで立ち止まって考える必要があるのは、この「観察者」という態度を、客観的であるとか、第三者的であると

いった態度と接合させてよいのか、ということだ。単純に考えれば、距離をとって被写体をフレーム内に小さく捉えるロング・ショットは、被写体の心理的状況を判然とさせず、またその人物への感情移入を阻害するものと考えられるかもしれない。けれども例えば、デイヴィッド・ボードウェルは、侯監督作品のロング・ショットを、単に感情をブロックしたり、被写体のアクションから距離をとったりするためのものではないと主張している。むしろ被写体の繊細な感情や微妙なアクションを捉えるための技法だと論じているのである<sup>1</sup>。このような分析は、侯監督の「観察者」ということばと齟齬を来すものではないだろう。被写体の感情や微妙なアクションを出来るだけ忠実にフィルムに捉えようとする行為は、観察的行為であると言ってよいのではないか。このような侯孝賢監督のロング・ショットという技法をめぐる、大きくわけて2つの考察の方向性は、単純にどちらかが正しく、どちらかが間違っているといったものではない。しかし、だからこそ、侯監督が繰り返し述べた「観察者」というキーワードを、侯監督作品のスタイル上の特徴との関係の中で、どのように位置づけるかが、ひとつの課題となるであろう。

もうひとつ抱いた感想は、侯監督の作品群をとりまく言説の多様さについてのものである。自身の幼少期や青年期を題材とした初期の自伝的な作品群や、228事件や日本統治下の時代、白色テロを扱った歴史三部作と呼ばれる作品群、『悲情城市』、『戲夢人生』、『好男好女』については、これらの作品が孕む政治性や歴史的な役割について語られることが多い。対して今回の発表では、近年の作品、特に台湾や中国を舞台としていない、『珈琲時光』や『レッド・バルーン』に関して、他のメディアとの関わりの中での多層性や、日常経験に基づいた記憶の喚起などといった、直接的には政治的ではないような視点から考察されていて新鮮だった。侯監督の作品を語る視点は、これまでも様々なものがあつたが、グローバル化された産業形態のなかで作られる近年の作品の登場で、その多様性はさらに高まったと言えるだろう。

私は、今回のシンポジウムにオブザーバーとして参加しながら、これらの多様な研究をとところどころ接続することによって、新たな研究／批評的な視座を得ることが出来るのではないかと感じた。例えば、「[二十年後の]『悲情城市』再考—音声、映像、時間、空間」は、『レッド・バルーン』以後の視点から『悲情城市』を読み解くという可能性を示唆しているように思われる。それは例えば、陳氏が強調した、美学的な達成という面にとりわけ見ることが出来る。彼は『悲情城市』の空ショットが、それまでの空ショットを「突破した」と述べていた。これは張氏の『レッド・バルーン』論における「ロング・テイクの脱領土化」と通じる部分があるだろう。他にも、アデン氏の発表と、ワダ・マルシアーノ氏の記憶についての問題を接続させても面白いかもしれない。ワダ・マルシアーノ氏の述べていた地図の記憶と関係させることで、アデン氏の言う国内で果たした『悲情城市』の文化的役割は、当時の台湾の人々が映画の風景などによって記憶を喚起させられたことによって、より強く働いたと考えることが出来るかもしれない。侯監督の作品の多様な見方をそれぞれ関係づけながら、新たな研究／批評の可能性を、今回のシンポジウムから見出すことが出来るのではないかと感じた。

1

Bordwell, David. *Figures Traced in Light: On Cinematic Staging*. Berkeley: University of California Press, 2005, p.206-208における議論を参照。